

岩波  
講座

日本文学史 第二卷 古代

# 憶良と旅人

高木市之助

岩波書店

憶良と旅人

高木市之助

## 目 次

|            |    |
|------------|----|
| 一 前書き      | 三  |
| 二 二人の太宰府生活 | 六  |
| 三 なりとあそび   | 八  |
| 四 官人の文学    | 二六 |
| むすび        | 二九 |
| 参考文献       | 二九 |

## 一 前 書 き

### イ はりあう心

この文学史はいわば戦後版として、日本文学の研究の成果を、若い人々ばかりでなく、年輩の読者にも伝えるという使命をおびているらしい。私は憶良と旅人の関係についてはずい分書いた。というよりも書かされた。したがってこれ以上書きたくないというのが、私のほんねではあるが、もう一度だけくりかえすことにしたい。といっても、私の考え方だって、年月と共に多少は見直して行くだろうし、それに今迄断片的に、少くとも個々に考えて来たことを、今度はこの一文にまとめてみようとするところに新しいといえはいえる私の試みがないわけでもない。

はい、あうという言葉がある。これは江戸時代のさやあてというまことに歌舞伎らしい、というよりも近世後期封建主義社会の生産らしい廓言葉につながる、もっと日常的な言葉かも知れないが、このはりあうということは、文学が創造される一つの基本的な作因ではないかと私には思われる。実例でいえば清少納言と紫式部、貞門と談林との関係などを指摘し得る言葉なのである。前者について少しばかり詳しく言っていえば、王朝の或る時代を藤氏摂関時代と大づかみにして人々がよく言うことであるが、清少納言と紫式部とは、当時の後宮である、定子中宮と上東門院の対立を代表する二人の女官だったと言われる。大まかに言っただけではあるが、ほんとうにはもう少し立ち入って考えてみなくてはならない。といったところで、これは既に言及されていることではあるが、定子と上東門院の関係と、清少納言と紫式部のそれとは、全然異質である。つまり上東門院の外戚である御堂関白は摂関政治の支配者

として、上東門院の後宮を定子のそのようにけんらんたるものにしようとして、言いかえると第二の清少納言たらしめようとして、紫式部を上東門院へ招いたのである。しかしながら式部自身は、結果から言って、清少のサロンを再建はしなかった。しないばかりか式部はかえって清少とはりあつてしまった。そしてこのように清少とはりあう、気持で生み出したものの即ち『源氏物語』ではなかったか。詳しくは、宣孝の未亡人紫式部が道長に宮仕えを誘われた時、宮仕えは式部にとって、夢であり、あこがれですらあったようである。このあこがれが達成されたよろこびを『紫式部日記』が事実として語っている。しかしいくばくもなく、式部に感知されたものは、そのような夢の彼方にしのびよって来る王朝貴族社会の崩壊であった。私はあぶなく『源氏物語』へ脱線しようとするのを踏みとどまって少しばかり式部が清少とはりあつた様子を報告してみたい。

清少納言こそ、したり顔にいみじう侍りける人。さばかりさかしだち、真<sup>まこと</sup>字書きちらして侍るほども、よく見れば、まだいとたへぬことおほかり。かく、人にことならむと思ひこのめる人は、かならず見劣りし、行くすゑうたてのみ侍れば、艶になりぬる人は、いとすぐうすずろなる折も、もののあはれにすみ、をかしきことも見うぐさぬほどに、おのづから、さるまじくあだなるさまにもなるに侍るべし。そのあだになりぬる人のはて、いかでかはよく侍らむ。(日本古典文学大系 一九卷 四九六頁)

といっている。これは式部を女聖人のようにまつり上げようとした江戸の学者、安藤年山の『紫家七論』などにとっては、ゆゆしい式部の言い分であるが、逆に式部を一人の人間として、日本文学史上稀に見る作家に擬するような場合には、見解は全く別であつて、そこで式部が清少とはりあつた事実こそは、作家の文学的創造精神を支える一つの原動力として高く評価されなくてはならないであろう。つまり式部が清少に強くはりあう心が、この名品を創造させた、少くも一つの文学的な支えだと思ふ。

## ロ 集団と個性

もう一つ序説として考えて置きたいことは一般に文学作品に於ける集団と個性との関係である。卑見によれば、この関係もまた古代から現代へ貫ぬく、文学の意義を考える上に一義的な問題のようである。図式的に言ってしまえば、貴族的な文学は個性的に孤高であり、民衆的な文学は集団的に親しみ深い。だがしかし文学作品の実体は、この図式をあてはめられるほどに機械的ではない。このことは文学作品の全分野にわたって考えられるのだが、例えば『平家物語』に対する場合、今日の人々はその成立上に集団的な叙事詩性を肯定しようとする一方、作家的個性に支えらるるのではなくてはこうした作品が創造されることは有り得ないとする。又近松の戯曲は日本文学史上に数少ない、いわゆる文豪の名にふさわしい天才作家であることに於て疑う者は少いのだが、その彼がしばしばとえられる欧のシエクスピアの場合と同じように、町人社会を代表し、当時そうした社会で生産され、流行した民謡文学的集団作品に大きな関心を持ち、それ等の作品に支えられて、こうした名品を創作した事も、誰もが疑い得ないところであろう。これは古典文学の社会に於ける僅かな一例に過ぎないが、近代文学の最も進歩的な一例をとって見ても、個性と集団とは同様に問題を孕んでいる。具体的には、小林多喜二の代表作である、『一九二八・三・一五』と『蟹工船』が矢つぎ早に出て、日本の読者が驚異の目を見張ったのは、つい此の頃のようにでも既に三十年経ってしまったが、この作が出た当時、文壇が派閥を越えて送った嵐のような絶賛は、文壇にあまり関係のない人々でもまだ耳に残っているであろう。但し私の言いたいのは、当時蔵原惟人氏が「作品と批評」の中で言った次の言葉についてである。

しかし集団を描かうとする余り、個人がその中に全然埋没してしまふ危険がある。私は同じ作者の「三・一五」を批評した際に、そこには前衛的な個人は描かれてゐるが、大衆的な集団が描かれてゐないことを指摘して置い

た。この作品には正に其の正反対の現象がある。プロレタリア作家は集団を描く為に個人を全然埋没してしまつてよいだらうか。『日本プロレタリア芸術論』上巻所収 昭和三十年 和光社

つまりこの疑問は謂わば、文学のありかた(単なる技法ではない)にかかわる問題として古典文学からプロレタリア文学に持ち越されているわけである。

ところでイ、ロ、二ツの課題を吾々は溯つてどこまであとづけることが出来ようか。私はこのように考えて、少くともそれは憶良と旅人の関係にまで溯り得ることを知るのである。二人は言うまでもなく『万葉集』の「聖武紀」に於けるすぐれた歌人であるが、私は本章でそのような意味で『万葉集』を代表する歌人として「憶良と旅人」の関係を採りあげようとは思わない。そうではなくて、以上、イ、ロ、二つの課題をここまで溯ることによって、比較的素朴な姿に於てそれを捉え、少くともそれへ何等かの示唆することをしてみたいのである。

## 二 二人の太宰府生活

旅人も憶良も万葉の官人らしく其の伝はあまりはっきりはしていないが、それにしても、旅人は大伴氏の棟梁として朝廷に仕え、それに一方詩歌の作者だっただけに、其の伝をうかがう文献もある程度求められるし、憶良の方は山上氏の同じように棟梁だったかどうかは不明であったかわりには、学歴もあり、歌も作り、それに遣唐少録として渡唐をしたりしているので、万葉歌人としては比較的経歴を知り得る方であるが、これ等の資料を集めても二人の関係そのものを知るには決して十分ではない。唯二人が多分偶然にも、神亀五年(七二八)頃から天平二年(七三〇)頃迄、太宰府で官人生活を共にすることが出来たことだけは明かであつて、其の間の作歌が巻五を中心として採録されてい

ることは、本稿のように旅人と憶良の両文学の相関的な関係を考えようとする者にとつては、不可欠の資料といわなくてはならない。二人の關係がその前後に於て、およそどのようなものであつたかということは、資料『万葉集』を含めても不十分で臆測を出ることは出来ないが、以前に於ては、二人の経歴がとかくくいちがひがいて、旅人は大伴氏らしく父安麿以来征隼人將軍として九州地方にあり、憶良は遣唐使の一行に加わったり、伯耆守などの地方官として任に赴いたりして居り、たまたま旅人が中務卿として、憶良が東宮侍講として共に中央官であつたことはあつても、両者の間に直接交渉があつたことを万葉文学によつて立証することは困難だし、少くとも、今日から、そのような想像をすることは無理である。又太宰府生活以後の二人の關係は、『万葉集』によれば、旅人が大納言に任ぜられて帰京した直後、太宰府の憶良から歌を旅人に送つたことはあつたらしいが、憶良が多分筑前守解任の上、上京したと思われる天平四年は、旅人が薨じた天平三年の翌年であつて、このような文献資料を信ずる限り、太宰府以後に於て二人の間に直接の交渉があつたとは到底思われない。随つて二人の關係は自然太宰府に於ける二三年の生活にしばらくはなならない。

旅人は府の長官として九州全土を統治する太宰帥であり、憶良は、帥を直屬長官として筑前一円を預る筑前守であつて、共に大君の遠の朝廷である太宰府に住んでゐた。しかも二人は中国文化の教養を身につけ、一方、和歌を嗜む文化人である。二人の間に単に為政者なり、官人として以上に深い理解があつたことと予想するのは決してまちがつてはいない。随つてこの意味に於て、二人の文学の間にも相通するものがあるであらうと想像するのは至極尤もである。唯しかし、二人の文学に於ける事實は果してそうであるか。そこで私が言いたいことは、二人の創造した文学は、事實としては、このような、むしろ当然に近い想像を裏切つて、「はりあつて」いるということである。かつて例示したことはあるが、以下もう一度一二の実例をくりかえしてみたい。



『万葉集』巻五は周知のように、旅人がその正妻大伴の娘女の死をかなしむ挽歌（七九三）から始る。それは

余能奈可波 牟奈之伎母乃等 志流等伎子 伊与余麻須万須 加奈之可利家理

世の中は 空しき物と 知る時し いよますます 悲しかりけり

ところが、その次に憶良の「日本挽歌」と題する一群の作品（七九四—七九九）が続く。つまり、「憶良と旅人」の関係は巻五で開巻と同時に充足するといえるわけである。しかしながら私が言いたいことは、この憶良と旅人の関係が既に「はりあって」いるということである。ここで従来文学史上の問題になっていることは、日本挽歌の主人公が果して大伴の郎女であるか、それとも憶良自身の妻だったかということであるが、卑見に随えば、それは畢竟鷗外の『青年』に於て「拊石」が漱石であるかどうかといった、或は漱石の『虞美人草』に於て、「小野さん」が厨川白村であるかといった、謂わば作品のモデルの問題でしかない。文学を追究する場合こうしたモデル問題も必要でなくはないが、それよりももっと必要なのは、鷗外と漱石がその文学作品それ自身に於て、いかに対決しているかという問題でそのような意味で私はこのモデル問題を通してでも二人の「はりあう」問題を考えるべきではなからうかある。

旅人の挽歌の契機をなすものは、聖徳太子によって代表される、或るまことに貴族的の哀しみである。此の歌の注者がよく世間無常の思想がうたわれていると解するが、文学論的に言えば不十分である。なぜなら世間無常なら「世の中はつねなきもの」とすべきであり、そのような表現は『万葉集』中に現に求めることが出来る。ところが旅人の表現は「むなしきもの」であり、それは「世間虚仮」という、多分この頃の慣用語から来て居り、それは太子の「世間虚仮唯仏是真」の句に溯ることが出来るという事実に基づく。旅人の歌はつまり、

妻が死んでやっと「世間虚仮」と聖徳太子がのたまう言葉の意味が分ったが、分れば諦観が出来そうなのに、私はかえって（これが「知るときし」のしのほんとうの意味であらう）ますますかなしくなってしまうのですよ。

というほどの意味であろう。そしてこうした挽歌に反抗対決しながら、挽歌とは文学としてどのようなものでなくてはならないかということ、自分の実作によって主張しているかのように見えるのが、外ならぬ憶良の日本挽歌であるように私には思われる。もちろん私をそう思わせるだけの根拠を日本挽歌そのものが持っている。即ち、憶良の日本挽歌に於ける「妹の死」はとうてい「唯仏是真」などという、仏の道などへはつながり得ないほどに現実的である。彼は「かく知らませば——国内くもことごと見せましものを」とうたう。お前がこんなに死んでしまおうと分っていたら、生きているうちに、国内あちこちを見物させてやったのに向うのであろう。又、「石木をもとひさけ知らず」とうたうのは、この忿懣は路傍に立っている木や、ころがっている石ころに向っても何か呼びかけたいみたいだ、というのであろう。これは一例にすぎないが、日本挽歌は終始このような現実的態度で妹の死に立ちむかっている。日本挽歌と題した「日本」の意味だって、旅人の外来思想に対する批判的態度であつたと思われる。少くとも、この長歌と五首の反歌のどこにも「唯仏是真」につらなる、夢見るようにひょうびょうとしたうつくしさがなく、ただはたしかである。「いよいよますますかなしかりけり」という表現にもどこか上品ですなおな気分がうかがわれるが、それだけ又、きく者へ強く迫って来るなにかがない。この物足りなさを誰よりも憶良が感じない筈はなく、現に彼は妹の死に対して旅人の使った「かなし」という語を一度も使っていないことも何かわけがありそうである。具体的に言えば、「かなし」い代りに長歌では「うらめしき妹のみこと」であり、反歌では、それぞれに「つまやさぶしく」(七九五)「いもがこころのすべもすべなき」(七九六)「ぐやしかも」(七九七)であり、他の反歌二首(七九八・七九九)は「わが泣く涙」とか「わがなげく」とかいつてはいるが、これを「かなしかりけり」と対比してみればわかるように、かなしというものが、いちじるしく静観的否行動的な表現であるのに対立して、泣くとかなげくとかいうのはいかにも意欲的行動的表現である。つまり憶良は旅人の先行歌「かなし」と抒した、上品であえかな詩境に対立し、「かなし」と類似は

していても、もっと現実的で、それだけまた人間臭い、うらめしとか、くやしとかいった言葉を選び、でなければ、又一層行動的な泣くとか、なげくとかいった言葉に置きかえることを、意識的か無意識的かにしていることになるのである。こうしたところで二人はまずは、あつて居り、そこから彼等の文学、少くとも憶良のそれが生れて来るわけである。

しかし二人は、二人が太宰府生活を共にする間は、あうことを忘れなかった。そのことを『万葉集』の巻五を中心として、われわれは文学的に確めることが出来る。巻五は前述巻頭の旅人憶良両者の対決から、長反一連の憶良の作を隔てて、同じ憶良の「子等を思ふ歌一首并に序」(八〇二—八〇三)へ続いている。「并に序」の方は、日本挽歌であるにも旅人の世間虚仮の歌を嫌った彼が、或る程度仏教にも通じていたことを証する以外にはたいした資料にもならないが、歌そのものの方は、なかなか手答えのある資料である。あまり長くもないので、参考のために、その全歌を次に掲げる。即ち、

|       |         |       |         |       |         |       |    |
|-------|---------|-------|---------|-------|---------|-------|----|
| 宇利波米婆 | 胡藤母意母保由 | 久利波米婆 | 麻斯提斯農波由 | 伊豆久欲利 | 枳多利斯物能曾 | 麻奈迦比尔 | 母等 |
| 瓜喰めば  | 子供思ほゆ   | 栗喰めば  | 況して忍ばゆ  | 何処より  | 来りし物ぞ   | まなかひに | もと |
| 奈可利提  | 夜周伊斯奈佐農 | (八〇二) |         |       |         |       |    |
| なかりて  | 安寝しなさぬ  |       |         |       |         |       |    |

#### 反歌

|       |         |       |         |          |       |
|-------|---------|-------|---------|----------|-------|
| 銀母    | 金母玉母    | 奈尔世武尔 | 麻佐礼留多可良 | 古尔斯迦米夜母  | (八〇三) |
| しろがねも | くがねもたまも | 何せむに  | 勝れる     | 宝子に若かめやも |       |

というのであるが、従来諸注では、独立してこの歌を解し、随って評価鑑賞に際しても、長歌を高く評価する割合に

は、反歌を觀念抽象歌として低評価する傾向を免れない。しかし卑見に随えば、本歌もまた旅人とはりあう歌であり、評価鑑賞も其の意味で見直されなくてはならない。というのは、憶良のこの歌は、旅人の有名な「讃酒歌」(巻三)を意識して作られたと見られる根拠があるからに外ならない。この一連の作歌が旅人の太宰府在任中の作であろうことは、諸注のほぼ一致するところであるが、作の契機については、諸説があつて必ずしも一致してはいない。今それ等の説を一々紹介する余裕はないが、唯土岐善麿氏の「旅人の讃酒歌について」という論文(早稲田大学『国文学研究』昭和二十九年三月)の所説は、憶良と関係しているという意味で、特に紹介する必要があるようである。氏に随えば、その作因に直接のモチフがあつたこと、そのモチフは憶良の罷宴歌一首ばかりでなく、「令反感情歌」(八〇〇—八〇二)「思子等歌」(前掲)「哀世間難住歌」(八〇四—八〇五)「貧窮問答歌」(八九二—八九三)や「恋男子名古日歌」(九〇四—九〇六)までも含めて、すべてが記憶によび返されて、作因をなしたという風に考えられて行くのである。

氏のこうした考えが、最初にいつどこで発表されたかを私は知らないが、その発表された年次を前記昭和二十九年迄引き下げるとすれば、終戦後であることは明かであり、そこで氏がこのような両歌人の対決についての私の見解が言及されていないところを見れば、この説は私が昭和十四年以来諸所で発表して来た卑見とは無関係に思いつかれたことも明かであるから、この際、ここで氏の説をもう少し詳しく紹介することは無意味ではない筈である。もっとも、氏の説を卑見と比べてみるに、色々の点で時に一致し、又時にずれるところがあるので、しばらくこうした異同の線に沿って、これを要約しつつ紹介することにした。

最初に、氏の説が卑見と相容れない点を指摘すれば、氏は「讃酒歌」と憶良の諸作との成立時期について、憶良の諸歌が成つた後に讃酒歌が成つたと想定するに對し、卑見は逆に、「讃酒歌」の後に憶良の諸作歌が成つたと想定するのである。尤も卑見にしても憶良の「罷宴歌」が「讃酒歌」に先立つことは、従来の諸説と同じくこれを認めること

に異議はない。尤も両説のひらきは、正直にいつて、両説とも想像説を出ていないところからすれば、第三者からみれば、水掛け論的關係に過ぎないであろうし、又土岐氏が旅人本位に考えているに對して、私が憶良本位であるところから来た、立場の上の事情を相互に考え合うことも出来なくはない。次に両説が相容れない点は、氏が「讃酒歌」の作因に、憶良の「罷宴歌」其の他の諸作を考えながらも、両者の間に相互に非難するような態度は見られないとして、どこまでもこの老長官と老国司との交情を、文学に對する見解の上にも移して、二人は一種ユーモアのうちにその交情を新にしているものと解したのに對し、私は太宰府に於けるこの二人の老官僚の勤務關係には何等の破綻は考えられなかったことを認めながらも、その文人としての作歌關係に於てはむしろ執拗に、はりあつたことを認めようとしたところにあるようである。この点は、実は両説の根柢に横たわる一つの溝でなくはない。つまり氏は窪田空穂氏の見解に支持されつつ、老旅人の詩境を味うことに専念しているのに對して、私は逆に、最近の歴史學に教えられつつ、老下級官僚の創造的經驗を明かにしようとしたところに、どうすることも出来ないくいちがい認めずにはいられないであろう。しかしながら、更に考えてみるに、両説の間には、以上のくいちがいはいくちがいとして、別に一つの根本的な一致点のあることを看過しないではいられないようである。それはこの両作家の間には、作歌の先後關係や、長官對国司といった公的關係から来る交情關係をしばらく措くとすれば、やはり「直接對置され得るもの」があるという点に於て、一致しているという点である。つまりそうした意味に於ては、或は意味に於てのみは、土岐氏もまた私の「はりあう」という、二作家の關係を認めて下さるであろうし、私もまた、旅人の「讃酒歌」成立の時期が明かにならない限りは、「讃酒歌」と「思子等歌」との先後關係を一方的に固執することを控えなくてはならないであろう。さてこのような条件のもとに言いうることは、要するに「讃酒歌」と「思子等歌」との間のはりあう關係を両作歌について、確認することではなくてはならない。即ち、八〇二の反歌で憶良が、「しろがねもくがねもたまもな

せむに」といっているのは、三四五で旅人が、「価無き宝」といい、三四六で同じく彼が、「夜光る玉」といっているのとつながり、又同じ反歌で憶良が「まされるたから」といっているのは、同じく旅人が三四五で「豈益まさらめや」といい、三四六で「豈しかめやも」といっているのと無関係ではない。私はかねてから、この二対の相関関係を、憶良が旅人の先行句を踏んで、このようにはりあったので、旅人が「夜光る玉」や「価無き宝」といっているのを受けて、憶良は、「しろがねも黄金も玉も」とうたい、旅人が「あにまさらめや」「あにしかめやも」とうたっているのを受けて、憶良は「(子に)しかめやも」とうたっているものであって、要するに、このようにして憶良は、公然と、三四五、三四六の諸句を移植することによって、八〇三の反歌が成立したことを明示しているのであるが、しかしもっと、憶良が言いたかったことは、その上にあつたので、即ち、憶良が旅人との間にもっと明かにしたかった関係は、旅人がこのような宝以上に高く酒を評価したことに反撥して、酒を「子ども」にすりかえ、

あなたは讃酒歌で酒を礼讃しているが、私にはそのように享樂的に或は貴族的に酒を礼讃することが歌の本領とは考えない。私にとっては、もっと現実的に、或は庶民的に礼讃するものがある。これこそ歌の本領である。それが子どもなので。だから、貴方の表現を使って、酒を子にすりかえるところなのだ。

というのであろう。尤もこのことは土岐氏の見解では逆になるのであって、憶良のこのようなリアルな詩観に対する旅人の反説として、讃酒歌が作られたとするのである。

ここで一言したいことは、土屋文明氏が、その『万葉集私注』の第五巻で、この「思子等歌一首并に序」と其の前後の二篇即ち「令反感情歌一首并に序」(八〇〇、八〇一)と「哀世間難住歌一首并に序」(八〇四、八〇五)を一括した三首が嘉摩郡で選定されたことが左注に記されているところから、憶良が国守としてこの地方巡行中、戸令の国守遣行の条の旨意を体し、三首の歌を作って部内の民に諭し、巡行の任務を果そうとしたものだと考えて居られることについて

である。『私注』のこの考えは、全く卓見であつて、『私注』の随所に言及して居られるように、三首のいずれもがこのような外部的動機に基づいているために、どこか概念的で憶良自身の個人的経験や感動に触れないで、それだけ感情の衝迫に欠けたところがあるのも已むを得ないといふべきであらう。唯しかし是等の作歌にそのような外部的動機があったことは認めたとしても、元来政治的才幹よりも詩人的資質が豊かであつた憶良とすれば、これ等の歌に、そうした戸令の条文に即応しようとする旨趣を超えて、創作本来の詩興をうたい上げることが無かつたとしてしまふことも出来ない筈であつて、以上私が土岐氏の見解と卑見とを彼れ是れ考え合せているのも、土屋氏のこうした外部的動機を一往認めながらも且つ、憶良の旅人への対決という文学本来のありかたは、憶良対旅人の場合必ずしも否定し去るには及ばないと信じてのことである。

このように考えて来ると、両説の間には、謂わば大きな溝があつて、これを埋めることは畢竟不可能だといふに近いようであるが、よく考えてみるとあながちそうでもなく、根本に於てはこれまであまり採り上げられなかつた、両者の間の一致点といつたものがあつたことに気がつくであらう。それは言うまでもなく、両者が相互に反説的に対置されているということであらう。例えば旅人が無上の宝として酒を礼讃していることと、憶良が同じ宝として、子を推すこととは、誰がみても相反的である。酒は少くとも旅人の考える限りに於て、世の中のあるべき道につながる、例えば竹林の七賢のような、現実から逃避しようとする人々に愛せられる何ものであるが、子どもの方はこれに反して、よかれあしかれ生活そのものに直結して現実を肯定させずには置かない何ものである。随つて、そのような酒を讃める歌の作者と、またそのような子どもを思ふ歌の作者の間には、相反的な文学観が懷抱されていたことはあまりにも当然であらう。そして土岐氏は憶良から旅人へこの相反的關係を指摘しているに對し、私は逆に旅人から憶良へは、あう、關係を考えようとするのであつて、なるほど方向は逆であり、それに媒介されて主張する詩観もまたち

がっているにしても、両作家に対置的關係を求めようとした点に於ては相通するものがあると言えないか。少くとも私は、そのような意味で、土岐氏と共に、二群の作歌の間に、はりあう關係を認めたく思うのである。

両歌人の關係について最後にもう一つ。

『万葉集』巻五の八五三から八六三へかけて十一首の短歌がならび、そのはじめに「遊於松浦河序」と題する漢文があつて、物語は序の漢文から歌へ自然に運んで、歌は序文中の蓬客と釣魚女子との贈答歌に擬せられ、最後の三首が「後人追和之詩」ということになっている。つまり序と歌とで一篇の歌物語らしいものを構成しているのであるが、作者については、契沖の『代匠記』（精選本）以来旅人ということになって居り、唯土屋文明氏はその著『旅人と憶良』並びに『私注』第五卷に於て憶良作であることを強く主張して居られるが、氏の諸説を知った上で武田祐吉氏が、「山上憶良の作とする説があるが、全く根拠のないこと」(『増訂万葉集全注釈』五・四六六頁)と断じて居られることにも耳を傾けなければならず、沢瀉久孝氏も同断であるところなどから推して私はそう安易に土屋氏の説を肯定することは出来ない。尚土屋氏が二書で論じて居られることを一々項目を立てて論破して行かれるところはいかにも痛快であるが、痛快であるだけにかえて冷徹ではなく、氏はその一項を、自から「此は勿論主観的独断である」と認めながら、直ちに此の(主観的独断を含むところの)一項をもつて作者旅人に非ずして憶良なりと推定するには最も重要な者とする類であつて、これだけで、反対説がけし飛んだように見えるのは、土屋氏の作家的雄弁のいたすところであろう。尤も私は氏の結論を否定し去ろうとするものではなく、旅人説の論拠の弱いことは土屋氏の指摘される通りであるが、それにも係らず、氏の論弁によつては、問題が決して解決されているとは言ひ得ないことを言いたいまでである。なおこのことについて、私はかつて卑見の一端を述べたことがあるが(『志賀の白水郎』二八四頁参照『古文芸の論』所収)、この考え方は今も變つていないことだけのことわけて置きたい。そこで仮りに土屋氏の説に随うとしても、なお残さ



れた問題として、序の部分、つまり漢文による部分を除いた、贈答歌の部分の作者が誰であるかということを考えてみることに出来はしないか。というのは、土屋氏も別の場合（大伴淡等謹状の場合）歌を旅人の作と認めながら、書簡の部を憶良の代作と考えようとして居られるのであって、松浦河の場合には、序と歌とを別けることがこれに比べて困難ではあっても、まず歌の部分が旅人によって作られ（追和の三首は氏も旅人作と認められるのだから）、これ等の架空作をとりまいて、旅人の意を受けた憶良が漢文で地の文を作ったとする 것도、必ずしも氏の意に背くとは限らない。それに、一方、氏の想定されるように「贈答歌」（八五四—八六〇）と「後人追和之詩」（八六一—八六三）とを別けて、前者を憶良作、後者を旅人作するには、この二群の作風があまりに酷似しているという難は（追和ということには、つとめて前作に追隨して作ることを含むとしても）このように、作歌全部を旅人の作と推定することによって解消するであろう。

さてこのようにしてどうにか旅人作に擬せられそうな、「松浦河の仙媛と蓬客の贈答の歌」にはりあう憶良の歌として、私は卷一六所収「筑前国志賀白水郎歌十首」（三八六〇—三八六九）を想定したい。このことに就て、私はかつて、やや詳細に考えてみたことがあるので（「志賀の白水郎」二八〇—三〇八頁）、ここでは省略するが、要するに、種々の理由によって左注の末尾に「或云。筑前国守山上憶良臣悲感妻子之傷述志而作此歌」とあるのに隨うのである。この一連の歌が何時作られたかということに関しては、卷一六の位置からは何等示唆される材料を求めることが出来ないが、左注にこの出来事を「神龜年中」とことわっているところからすれば、憶良の管内巡行は、神龜年中に対する天平の、それも二年頃と考えるのが一番穩当であって、してみれば、天平二年の初夏らしく想像される、旅人の此の架空作を知った上で、憶良がこの志賀の白水郎の一連作歌を作るといふことも十分有り得ることになるであろう。（尤も先に土岐善麿氏の説を紹介するところで言及したように、先後関係は逆になつても一往かまわないのであって、憶良がこの